



Title	哲学相談における不和の必要性 : 「不和」によって「自分になること」
Author(s)	ベ, テジュ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 57-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

哲学相談における不和の必要性——「不和」によって「自分になること」¹

ベ・テジュ (BEA, Tea-Ju)

1. はじめに

不和 (disagreement, dissensus)²という単語は、不便なこと、さらに不穏なものと認識される傾向にある言葉である。その不便さは、世界と事態を見る態度や社会文化的な環境などの要素に起因したものかもしれない。「不和」のフランス語訳であるメザンタント (mécontent) は二つの意味を持っている³。第一の意味は「聞かないこと」と「理解しないこと」であり、第二の意味は「論争」または「葛藤」である。政治哲学者であるランシエール (Jacques Rancière) は、「不和」のこういう二重の意味から政治の意味を新しく語った人物である。ランシエールは政治を感性学⁴の観点で見る。彼によれば、政治は「誰が権力を握るか、いかに統治するか」の問題ではない。一般に我々が政治の意味として認める権力と統治は、彼にとって「治安 (police)」の問題である。治安は与えられた座にふさわしい感覚を持たせるための統制

¹ 本稿は韓国研究財団 (BK21プラス事業) の支援を受けて研究したもので、現代ヨーロッパ哲学53号 (2019) に掲載した論文を修正・補完したものである。

² ランシエールの“mécontent”は、英訳ではdissensusまたはdisagreementと訳される。*Dissensus on politics and aesthetics*, edited and translated by Steven Corcoran, 2010, Continuum, London; *Disagreement: politics and philosophy*, translated by Julie Rose, 1999 by the Regents of the University of Minnesota; 訳語「不和」の意味は「和合しないこと」または「仲が悪いこと」である。翻訳者はフランス語メザンタントを表す訳語は見つかりにくいと、翻訳の難しさを述べている。『不和』ジン・テウオン訳、ソウル：図書出版ギル、2015、p. 215。

³ ジャック・ランシエール『不和』215、解説参照。

⁴ 『感性論あるいは感性学 (Ästhetik) は感覚器官によって知覚されるものに関する理論である。感覚器官によって知覚されるのは感性的なもので、概念的思考によって把握された明晰判明な理性的なものに比べて混然で低級なものとして容認される。バウムガルテン (A. G. Baumgarten: 1714-1762) の時代になると、理性的な認識の学問である論理学 (Logica) に相対するものとして感性的な認識の学問である感性学 (Aesthetica) が登場する。抽象的な思考から得られる理性的な認識に対して、感覚や知覚など事物の直接的な作用によって与えられる対象認識を感性的な認識と言う。感性的な認識から出発して抽象的な思考を通して理性的な認識に進み、人間の認識はこの両者の絶え間ない相互転換と補完の過程を経て発展する。特に近代美学の成立に際して、人間の感性的な領域は新しく評価された。』キム・グァンミョン「感性科学に対する哲学的論議—感性的な認識の問題を中心に」『感性科学』1、韓国感性科学会、1998、p.4. 引用。

を意味する。治安は「聞かないこと」や「理解しないこと」によって他者を排除する。これに対して、ランシエールの言う政治とは、感覚的なものの共通経験を再編することである。感覚的なもののパルタージュ (partage)⁵を新たにするということは、固着された感覚の分配方式から脱するということである。「不和」はこのように「見えなかったもの」を見えるようにし、「分け前のない者の分け前」を語る過程であり、「主体化 (subjectivation)」とともに起きる過程である⁶。このうち主体化は、ランシエールが治安の論理との断絶を可能にする装置と見る概念でもある。

本稿はランシエールが政治哲学で扱った「不和」の概念を、哲学相談の自己治癒の観点から考察する。哲学相談を感性的な認識の次元で接近する試みであって、不和が自己治癒という哲学相談の意味と密接に関係していると見るからである。言い換えれば、自己治癒という哲学相談の特性を「不和」を通じて説明しようとする試みなのである。哲学相談は、人々に自分の問題を自ら考え、自ら解決できる能力があるという仮定から始まる。これは哲学相談が他者の介入できない病理的現象に関係しているのではなく、「哲学すること」によって自己治癒の意味を探索することであることを示す。哲学相談は理性的な思惟を通じて人生の問題を扱おうとする。ところが、人生の具体的な問題において感性的な認識の側面は除きにくい。感性的な認識としての共感への関心は哲学相談の研究においても例外でなく、多様な角度から研究が行われてきた。このとき共感とは、相談者が来談者の苦しみを深く認知し配慮することによって、来談者の自己治癒を助けると思われる。特に「ついて行く」と「共にする」という共感の特性は、来談者に対する相談者の態度に関連する。しかし本稿では、哲学相談における「自己治癒」が意味あるものとして機能するために、来談者の「自分になること」とともに働く「不和」の意味について考察する。「不和」は特に他者あるいは対象に自分を任せる嗜癖的な人生の問題を解決していく過程で必然的に向き合うことであり、不和に対する新しい理解は哲学相談の接近法を多様化させられると思われる。

「不和」は現代人が経験する嗜癖的な形の人生において、その必要性がより明らかになる。現代人はおおそ自分ではなく、自分の外にあるものごとに依存して生きていく。特に物質的な人生に対する追求によって維持される資本主義体制は、自分を失うことに気づくことすらで

⁵ ジャック・ランシエール、同書、pp. 263-264。翻訳者の用語解説参照。‘partage du sensible’でpartageは分割、分配などと訳されてきたが、ジン・テウォンはその訳語には分離の共同性が込められないと見た。ジンは分割、分配、共有の意味をもつ固有の韓国語である“나눔 (ナムム)”を用いたヤン・チャンリョルの翻訳に同意している。ところが、本稿ではこの韓国語に一致する日本語の訳語がないと判断し、フランス語パルタージュ (partage) をそのまま使用することにする。ただし文脈によって必要な場合には分割、分配などに翻訳する。

⁶ ジャック・ランシエール『政治的なもののほりて』ヤン・チャンリョル訳、ソウル：図書出版ギル、2008、143; 247-249参照。

きなくする。これは嗜癖の現象とほかならない。すべての嗜癖は自分を対象に任せる。成果のためであれ、快樂のためであれ、あるいは逃避のためであれ、どんな対象においても嗜癖現象は起きる。嗜癖の対象は食べ物、仕事、ショッピング、運動、薬物、他者の視線や学習された価値観など、人生の全面にかけている。嗜癖はよしあしや善悪に区分されることではない。対象に自分を任せたまま自動的に見、聞き、話すとき、嗜癖は人生を掌握する。こういう受動的な人生は、習慣または固定観念という言葉で人間の一般的な傾向性として受け入れられている。エーリヒ・フロムは特定の対象や思考活動、行為などにおいて自動的に動く人形みたいな状態になってしまった人間に、積極的な自由の完成を成す「自分になること」は難しいと見た。なぜならば、現代社会が個体化を通じて得た自由は孤独を伴い、この孤独に堪えられない個人は画一化に身を投げることによって、「自由からの逃避」を敢行するからである。このことは流行という社会現象からも確認できる。また、資本主義体制が要求する「客観性と効率性という人生の条件」に堪えるために自己を疎外させる個人は「事物的な存在」に転落し、いつでも「代替可能な付属品」になってしまう⁷。ハン・ビョンチョルが語る「性と社会の主体」は新自由主義の経済体制の産物であり、彼らが身を任した自由も自分を完全に生かせない。自発的に自分を搾取する人間は、成果の極大化のために「強制する自由」によって自らを摩耗させるからである⁸。

こういう日常性に陥った現代人の人生は、本当の自分の姿をもって生きていくことを難しくする。与えられた座に埋もれて、その座が要求する感覚で生きていくのが嗜癖的な人生である。これはハイデガーの言う非本来性に陥った人生であり、ランシエールの言う治安に例えられる状況であると言える。陥った状態には自分を忘れることから得られる安定感の逆説が内在されている。陥った状態が与える一時的な安定感と満足感は自己喪失を土台としているので、自己破壊につながることに決まっている。こういう人生において「不和」は慣れていない感覚を呼ぶことであり、自分に与えられた座が要請するのと違う感覚を呼ぶことによって起きることである。一方、嗜癖の人生から脱するという事は不和を経なければならぬということの意味する。このとき「不和」は今までのものになっていた馴染みのない感覚を呼び起こすとき発生することで、不和を通さずにこういう病理的な現象は治癒されない。また、自己喪失の問題において「自己治癒」は自分になることにつながっていると見るべきである。哲学相談が自己治癒と自己省察を目標とする限り、来談者が自分の問題に対面する過程で起きる感性的な次元

⁷ バク・ナンヒ「自己実現と自己治癒としての哲学」韓国哲学相談治療学会学術大会、韓国哲学相談治療学会、2010、 p. 18 参照。

⁸ ハン・ビョンチョル『疲労社会』キム・テファン訳、ソウル：文学と知性社、2012、pp. 27-29.

の「不和」は排除できない。言わば、この時の「不和」は間違っただけのもの、あるいは避けるべき否定的なものではない。

本稿ではまず、現代社会または人生の傾向性として現れる受動的な人生を、与えられた生活世界に一致するランシエールの「治安」⁹と他者に依存して自分を失う嗜癖に例えられるものとして見て、「不和」と共にする「自分になること」の意味や自己治癒における「不和」の必要性について考察する。というのは、「不和」の有意味さを肯定的に認識するとき、哲学相談が追求する自己治癒がその意義を持つと見るからである。

2. 自己治癒に対する反応的な理解の限界

共感とは理性的な論理の思惟や観念的な認識ではなく、感性的な認識の次元で注目されてきた概念である。理性によって抽象化された人生ではなく、直接性に基づいた人生の観点から見る人間存在は、一つの個体であると同時に時空間という限界状況に直面しているという点で「他者との共存在」¹⁰であるからだ。

相談者と来談者、そして来談者の人生の物語とで構成される相談において、相談者は共感を通して来談者の人生を志向する。感性的な認識としての共感で「自己治癒」は、来談者の人生を追って感じ、追って思う過程で相談者が来談者に対する指示的な態度を撤回することによって成立する。しかし、反応的な理解として認識される共感を、来談者の「自己治癒」という積極的な意味を含んだものに見なせるか否かということについては検討が必要である。

哲学相談は人生についての哲学的な質問に対して「抽象的で普遍的な思惟」をするように導くことによって、間違っただけの認識から離れさせようとする。ところがそれが扱う問題は、現在問題になる「具体的で個人的な事案」¹¹に関係するものである。それゆえ、具体的な人生の問題を扱うためには論理的な認識だけでなく、感性的な接近が必要なのである。「理論的な認識」が

⁹ ランシエールは「集団の結集と同義、権力の組織、場所および機能の分配、こういう分配に対する正当な体系が作られる過程」を治安と呼ぶ。彼は治安を「感性的なものの構成 (configuration du sensible)」と見るが、これは治安が「行為の様式と存在の様式および話しの様式の間のパルタージュを定義する身体の秩序であり、この秩序は身体がその名称によって一定の場所で一定の課題が与えられるようにする」ものであると見るからである。「この秩序は見られるものと話せるものの秩序であって、ある話しは談論に属するものとして、ある話しは騒音に属するものとして区別できるようにする」ジャック・ランシエール、『不和』、ジン・テウオン訳、ソウル：図書出版ギル、2015、pp. 61-63。

¹⁰ マンフレッド・フリングス (Manfred S. Frings) 『マックス・シェーラー哲学の理解』グン・ギョヨン訳、デグ：イムン出版社、1995、p. 57。

¹¹ ピーター・B. ラービ、『哲学相談の理論と実際』、キム・スベ訳、ソウル：シグマプレス、2011、p. 26。

統一性を志向するならば、「感性的な認識」は「人生の豊かさと多様性を志向」¹²する。哲学相談が来談者の人生に対する共感を語るのも、来談者の体験の領域を感性的に認識するためである。来談者は不明瞭であり矛盾に満ちた人生の世界で、自ら質問しそれに答えることによって哲学相談が究極的に志向する自己治癒に向けて進むべきである¹³。

ピーター・ラービ (Peter B. Raabbe) は来談者の体験を追体験するために、「共感し傾聴」することを主張する。追体験を通して相談者が体験するのは、来談者が自分の情緒、行動の欲求、存在の仕方などに理解した世界である¹⁴。ラービはここで何よりも傾聴という「反応的で受動的な方式」の相談を強調する。そしてこの時の共感を、感情的な同調ではなく「感性的な省察」に規定することによって、共感が「感情に対する情緒的な反応と来談者の観点を受け入れる認知的な理解の行為を含んでいる」ことを示す¹⁵。ラービのこの立場は哲学相談における感性的な認識の意味を示すとともに、共感が来談者に対する相談者の態度であることを見せる。

一方、キム・ソンヒは自分の思考実験のモデルで来談者の共感について論議する。想像力を呼び起こして理性的な思惟活動を促すことを目標とする思考実験において重要なのは、来談者の共感である。この実験で来談者は相談者が提示した本を通して登場人物に共感することによって、自分の問題を新たに認識し明瞭にする。そしてこのことによって「来談者は自分の苦痛を堪える意味ある存在に自らを革新する内的な力を強める」¹⁶。ここで共感とは理性的な思惟活動を助ける促進剤の役割をすると評価される。しかし、この場合も来談者は相談者が提案した本に共感して問題を解決していく。これは自己治癒の意味を制限することであって、このことで相談者の力量または相談者との関係形成という外部的な与件が必要であることが確認できる。相談者の専門的な知識を期待する来談者は、自分に共感を表す相談者に信頼をもって自身を開放する。相談者の真実性と人格を重要視するのも、来談者が相談者に自分を任せることから開放が始まると見るからである。

マックス・シェーラー (Max Scheler) は共感を「没価値的」であり「反応的」であるものとして診断したことがある。共感の過程にある自分自身や他人に対しては、価値判断ができない

¹² キム・グァンミョン「感性科学に対する哲学的論議—感性的な認識の問題を中心に」『感性科学』1、韓国感性科学会、1998、p.4.

¹³ キム・ソンヒ『哲学相談の方法論—哲学的な思考実験と自己治癒』パジュ：アカネット、2016、p. 313.

¹⁴ ピーター・ラービ『哲学相談の理論と実際』p. 28.

¹⁵ バク・ビョンジュン「共感と哲学相談—マックス・シェーラーの共感概念を中心に」、哲学論集36、西江大学哲学研究所、2014、pp. 9-13.

¹⁶ ホン・キョンジャ「哲学相談のための共感的対話、理解そして解釈」『哲学研究』135、大韓哲学会、2015、p. 87.

と見たからである¹⁷。シェーラーはまず他者との分離意識を前提にすることによって、感情的な同一視を遮断する。そして他人の苦痛に対して「追って感じること」と「同情的な反応が結合した本来的共感」のみを、本当の意味の共感として把握する。そしてここでシェーラーは相互同一の共感、感情の伝染、感情の合一を共感と類似したものと見なしたが¹⁸、感情の伝染と感情の合一は心理的な勘違いに過ぎない共感の「病的な様式」に、共感は「精神的な作用」に属するものに区分した¹⁹。しかし、共感「追って感じること（追体験）」に基づいており、「追って感じること」はさらに「感情の合一」を基に位階的につながっていると²⁰把握する。結局、共感「感情の合一や感情の伝染とは区別されるにもかかわらず、完全に分離されたものとしては見られないということである。そしてその類似性によって共感「感情的なものとして認識できる」ということが示される。

シェーラーは共感を「すでに理解され把握された他人の体験に付いて登場」するものであると言う。この時他人の自我は「自分の自我より先に与えられるもの」であって、「無意識的であり自動的に吸収して、実際の由来が完全に隠蔽された観念と体験に満ちた存在」²¹として把握される。自我と他者つまり自我と世界または共同体は分離できない関係にあると見るからである。一方、シェーラーは感覚的な現象を「原初的に与えられる構造の土台として作用するときのみ与えられるもの」と見る。そして彼はそれが「全体性を指示する表示機能と描写機能ができるときのみ与えられる」²²のものであると思う。これは知覚を前提にして他者を推論してもその

17 マックス・シェーラー『同感の本質と形態』、ジョ・ジョンオク訳、ソウル：アカネット、2006、pp. 36-39；シェーラーは感情機能と感情状態を区分する。共感「志向された感情状態がない一つの機能」である。共感において同一のものは「価値事態」であり、「感情機能」は分離されているのでともに悲しむことに与えられた感情が他者に同様なまたは類似した状態を生産することはない。またシェーラーは感情と精神の間の位階を分けて、上位のものが現れるのをより価値のあることとして見なす。前掲書、p. 99；108参照。

18 マックス・シェーラー『共感の本質と形式』イ・ウルサン訳、ソウル：知識を作る知識、2013、pp. 42-53；同感（sympathy）と共感（empathy）は同一に、あるいは区別されて用いられる。同感「同情に、思いやり（compassion）や哀れみ（pity）などとの対比で共感（empathy）は感情移入という言葉に訳されることもある。イ・スンフン「多様性、同感、連帯性」『東洋社会思想』25、東洋社会思想学会、2012、p. 11；シェーラーの著書 *Wesen und Form der Sympathie* は、『同感の本質と形態』と『共感の本質と形式』などに翻訳されている。ここで sympathy は同感または共感に訳されていることがわかる。しかし一方では、‘sympathy’を同感に訳し、共感（empathy）と区分することもある。本稿では同感と共感を区分せず、sympathy を一般の意味である「共感」に表記する。

19 マックス・シェーラー『共感の本質と形式』p. 90 参照。

20 共感が自分との類似性に基づき、親近な関係性に左右され、「内集団偏向」を持っているものとして働けるという問題指摘は、哲学相談が実践的な接近であるという点で考慮すべき問題である。ファン・ヒスク「共感の光と影」『哲学論集』48、西江大学哲学研究所、2017、p. 35。

21 マックス・シェーラー『同感の本質と形態』pp. 574-575。

22 マックス・シェーラー『同感の本質と形態』p. 520。

方向は「普遍的な文法」に合わせていると見ることで、この観点からすると共感による治癒は「普遍文法」²³に合う人格をそなえていくことになる。すなわち、共感を通じた自己治癒は普遍的な文法、既存の世界、既存の共同体に合わせていく作業となる。シェーラーは共感が愛に基づくとき人格に進入すると見る。このとき共感は、自立的に存在する人格が「存在的には共同体の人生のために規定」される通路であり、「目的論的には秩序維持のための通路」²⁴に過ぎないものである。共感感情の合一と違って感情ではない精神的なものとして扱われるが、人格を可能にする愛とは違って通路の機能だけをする。シェーラーは「人格の自己開放」もまた「愛への報い」²⁵から成ると言う。こういう構図は個体を「間違い」と見て、個体の間違いを克服し普遍に統合されることを正しいとするとき、意味を持つと言えよう。そして愛が前提されるときのみ、自己主動性の意味が働くと考えられる。このように共感具体的な人生の世界を理解するために必要な感性的な認識ではあるが、シェーラーの論議を受け入れて反動的であり受動的な特性によって自己治癒という哲学相談の意味を説明するには限界があることがわかる。特に嗜癖という問題状況ではさらなる限界が感じられる概念である。

3. 嗜癖と治安、そして解放

嗜癖 (addiction) は「あるものごとに進むことによって、自分をそれに渡す形で屈すること」を意味する²⁶。嗜癖が持つ自己喪失の構造は、対象に対する奴隷の状態をもたらす。また嗜癖は行為自体ではなく、その行為が情緒的に意味するものごとを追うことであるので、感覚の具体性を失った偽りの意識が支配する状態であると見られる。そして嗜癖は欲求が奪われた時の苦痛のみならず、欲求充足の喜びと愛に対する欲求をも麻痺させる形に現れる²⁷。

嗜癖の主な形態である反復は自己調節力の喪失である。渴望によって行為に対する統制力を失い、否定的な結果が出るにもかかわらずその行為を続ける²⁸。このとき反復は渴望の構造を維

²³ マックス・シェーラー『共感の本質と形式』p. 40。

²⁴ マックス・シェーラー『同感の本質と形態』p. 160, 161, 167参照。

²⁵ マックス・シェーラー『同感の本質と形態』p. 226参照；「愛はけっして感じるものではなく、一つの作用であり運動である。これに対して、共感、価値と状態を感じる機能である」マックス・シェーラー、『共感の本質と形式』、p. 94。

²⁶ グォン・ジュンテ「嗜癖に関する哲学的考察—哲学相談の新たな領域」『現代ヨーロッパ哲学研究』39、韓国ハイデッガー学会、2015、p. 76参照；英語addiction (嗜癖) の語源はラテン語addicereで、「何に屈服する、何を譲渡する、何に進む」の意味である。ラテン語addictは奴隷を指す言葉でもある。

²⁷ クレイグ・ネッケン (Craig Nakken) 『嗜癖の心理学』オ・ヘキョンン訳、ソウル：ウンジン知識ハウス、2008、p.62。

²⁸ バク・サンギウ他『嗜癖の理解と相談の実際』ソウル：ハクジサ、2009、p. 17。

持しつつ、無味乾燥に続く。嗜癖された者は自己逃避と快楽追及によって無気力に陥るか、嗜癖の対象を通して幸福感を統制しようとする。嗜癖物質や嗜癖行為によって安定感と幸福感が調節できると信じるからである。嗜癖は、最初は快楽や苦痛の緩和という肯定的な補償を経験する。しかし自分に満足をもたらす行為が繰り返されるにつれ、より強い愛着と²⁹ともに他の結果がもたらされる。耐性ができた身体は同じ満足を感じるためにより高い強度や持続を求めるようになり、このことによって被害が発生する³⁰。

自己放棄を通じて満足を求めるこのような嗜癖の特性は、ランシエールの言う治安または正体化に直面した状況に例えられる。ランシエールにとって政治が感覚的なもののパルタージュを新たにすることであるとしたら、治安はある座に分け前を割り当て、その座に合う話しや聞き、行いを指定することである。気づきにくいきっかけから始まったとしても、体と意識を漸進的に掌握して慢性的になる嗜癖と同様である。また嗜癖対象に自分を任せたまま対象に向かう渴望に駆け上がる時、嗜癖された者には心配がない。自分の世界はもちろん、周りの世界も消える。

こういう嗜癖的な状況はエーリヒ・フロムが診断した現代人の特性においても見られる。フロムは自分の個性を諦めた個人は「外部世界に没入することによって」孤独と無力感を克服しようとするが、個性化に逆行する過程は必然的に「服従の性質」を帯びると言う³¹。こういう状況は流行に従う人々が自らは自分だけの個性を追求していると思うが、流行という名のもとで画一化されていることにおいてよく見られるということである。他者が提示したことに合わせた状態を自分のものとして認識し没入する者は、嗜癖対象や嗜癖行為から得られる情緒と釣り合う関係のみに執着する。自分に与えられた役割と地位が必要とする感覚との調和のみが重要になるように、嗜癖はほかの感覚と周りの世界を排除する。異質なものを排除あるいは包摂して一つの秩序の中に閉じ込めることによって、その異質性が作る緊張や不便さとともにもたらされる世界と向き合うことを不可能にする。嗜癖から逃れるということは、嗜癖の体系を固着させる秩序と断絶する実践である。

嗜癖のメカニズムによって感覚は各々の位置で役割を担当し、その役割に合う感覚と知性をそなえる。嗜癖対象によって支配される体が嗜癖の秩序が定められた空間であるならば、自分

²⁹ クリスティーン・コルドウェル『体への旅立ち』キム・ジョンミョン訳、パジュ：ハンウル、2007、pp. 16-18。

³⁰ バク・サンギウ他『嗜癖の理解と相談の実際』p. 16。

³¹ エーリヒ・フロム『自由からの逃避』ウォン・チャンファ訳、ソウル：ホンシン文化社、2014、p. 31。

自身のいる場所は隙間あるいは亀裂である³²。ランシエールに政治は「見えなかったのを見えるようにするもの、単なる騒音だったのを話として聞こえるようにするもの、特殊な快楽や苦痛の表現だけであったのを共通の感覚として現れるようにするもの」³³である。哲学相談をランシエールの政治と関連づけてみると、哲学相談は相談者が来談者に同一視されるか、来談者が相談者に同一視されて一つになることを意味するのではない。誰かの主導権を規定することでもない。むしろ相談者と来談者との「間の関係である一つ」³⁴を形成することである。このことは分け前のある嗜癖された感覚と分け前のない感覚が「共にある」ことから始まるのと同様である。

しかし、嗜癖や階級的な秩序のある相談または治安 (police) は、こういう緊張を除去する。与えられた座に固定したまま安定を維持するからである。相談においてそれは相談者の指示に従って来談者が合わせていく形になる。我々はそれを調和と安定の状態であると思う。しかし、自己治癒は自分になることの「固有の空間を作ること」であり、これは不和の形としてまず現れる。このことは「感覚的なもののパルターージュを実行する」自分自身と「感覚的なもののパルターージュが働く世界」が見えるようにする。感覚的なもののパルターージュは「二つの世界が一つの唯一の世界の中に現存」する「不和を顕示すること」³⁵である。自分になることは自分への沈潜を意味するのではなく、見えなかった自分を現しだすことによって「離接 (disjunction)」³⁶の空間を作ることである。これに対して、嗜癖された体は嗜癖対象との調和の中で正体化された状態であると言える。ランシエールのいう正体化は社会が与えた観念や役割に固着されることで、治安論理に従うことを意味する。一方、正体化から脱するということは、嗜癖されて分け前のない感覚が現れるように感覚的なもののパルターージュを再度行うことである。この過程がランシエールのいう「不和」である。相談者が提示する思考実験の模型で、来談者に思考実験の模型を提示するのは相談者であるが³⁷、その席に座る瞬間来談者はすでに「解放された観客」つまり脱正体化を経験する。そして哲学相談という場を通じて来談者の感覚体制は「接続 (conjunction) と離接」が重ねた美学的な共同体を構成する。

ランシエールはある作業の結果物の前にある者がその結果物を専有し、自分のものにするとき解放があると言う。これは作品が存在するという事実または作品を見るという事実自体が解

³² ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』ヤン・チャンリョル訳、ソウル：図書出版ギル、2008、p. 14。

³³ ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』p. 253。

³⁴ ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』p. 140。

³⁵ ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』p. 249。

³⁶ Rancière, Jacques, *The Emancipated Spectator*, translated by Gregory, New York, Verso, 2009, 58.

³⁷ キム・ソンヒ『哲学相談の方法論——哲学的な思考実験と自己治癒』p. 13。

放であるという意味ではなく、観客自らが読んだり、見たり、聞いたりしたものの可能態によって既存の条件を再構築することに解放があるという意味である。嗜癖から脱することは結局「話し、見、行う関係を作る明証性自体が支配と隷属の拘束に属するという事実」を理解するとき始まる。言い換えれば、嗜癖対象によって提供される快樂の明証性自体が拘束であるという事実を理解するとき、嗜癖から抜け出し始まる。また、「見ることと聞くことという感覚経験も位置を分け、変形する行為でありうる」ということを理解するとき解放は始まる。嗜癖が特権として定めた話しや行為のやり方を違反し、改めて感覚の体系を作り上げるのである。嗜癖対象を除去することだけで、嗜癖は予防できない。自分で感覚の枠を変えないと、嗜癖は対象を変えつつその体系を維持するからである。嗜癖の反復的な特性によって本来あるべきものが排除されるとき、再び隙間を作り排除されていた自分を現しだすのが「不和」である。

4. 「不和」と自分になること

「自ら解放されるということは離脱を敢行するのではなく、共通の世界を共有する者として自分を肯定すること」である³⁸。ゆえに個人を事物的な存在に導く生活世界と傾向性に縛られた人生で経験する問題において、解放の原理として提起された「不和」の概念を考察することは重要である。ランシエールは哲学が何かに関する思惟の効果を生み出すためには、「不和」の地点が見つからなければならないと言う³⁹。この意味で哲学相談はすでに「不和」の空間である。来談者が席に座り、自分の私的な空間に書いておきそうな言葉を話し出す瞬間「不和」は働く。話していた者が聞き、聞いていた者が話すように既存の感覚を破裂するのが「不和」である。嗜癖の体系に定められた体は、感覚経験を再び分けることを拒む「目的のない空間」である。「不和」はこの空間の形を変えて、「名付けられるもののある空間」に変える。自分になることはその手順であり過程である⁴⁰。そういう意味で、哲学相談におけるランシエールの「不和」に注目するのは意義あることである。

「不和」は「理解や意見の対決」ではない。ランシエールにとってそれは、感覚的なものと感覚的なものとの間の隙間を現しだすことである。「不和」は「見えなかったのを見えるようにするもの、見せる理由がなかったのを見せるようにするものであり、一つの世界をほかの世界の中に入れるもの」である。ところが感覚的なもののパルターージュは、一つの世界にほかの

³⁸ ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』 p. 114。

³⁹ ジャック・ランシエール『不和』 p. 17。

⁴⁰ ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』 p. 253。

世界を重ねて混成することではない⁴¹。ほかのものを排除することでもない。共通の空間に出しにおいて「相互異なる感覚を持つようにするパルタージュの境界を現しだすこと」である。ランシエールは「公的な場所である世界を私的な場所である世界に置くこと、自分の苦痛を表すために叫んでいた世界に置くこと」のようなことであると言う。感覚的なもののパルタージュとは感覚経験のなかに「葛藤の共通空間を作ること」であり、その「感覚的な関係のなか」で「不和」が働く⁴²。調和と一致の状態に慣れた場合、こういう状況は不慣れで不便である。特に嗜癖や嗜癖のような傾向性の強い人生において、ほかの感覚的認識が現れるのは楽ではない。

相談者が共感の姿勢で傾聴しても、来談者と違う生活世界の「感覚に対する理解と要求、強度を持つ言葉」を交わす状況で、「不和」は偶然生じられる。相談で相談者が来談者と一致した結論を出す場面を作ったり、来談者が相談の形式に合う話し方で妥当性を証明したりするならば、そこには「不和」が生じない。「不和」が生じないということは感覚的なもののパルタージュができないように一つになることを意味する。これは嗜癖によって構造化された感覚がその中で安定感を感じるのと同様である。嗜癖によって管理される感覚だけが実在すると思ひ、その感覚だけを認めようとすればするほど、人生の豊かさは消えていく。また、認識の基礎である感覚の間に亀裂を作る「不和」を認めることができなければ、人生の主体は無気力から脱しにくい。嗜癖された人生はその理解より先に感覚的なもののパルタージュを新たにし、理解の後にもさらに感覚的なもののパルタージュを新たにしないといけない。理解は感覚のパルタージュとともに現れなければならない。それが来談者の理解と相談者の理解の差異であると言える。

ランシエールは「不和」を言語状況、権利証明、感覚能力の体制の側面で扱う。ランシエールが言語状況として規定する「不和」は「ほかの人の話を聞きながらも聞き取れない」ことを意味する。これは「言葉はわかるがその言葉の意味をわかりたくないとき」起きる。こういう状況は、合理的な「論証の形式」によって説得するうちに「談論の強制」を見せる「談論共同体」を含むコミュニケーション行為モデルを指すのではない。同じ白についてそれぞれ異なる白を考えているから同じ理解ができないか、「白という名称で同じもの」について話していることが知らない人々の間の葛藤⁴³である。ランシエールのいう「不和の固有さ」とは自分が「どの世界に属しているか」を見せること、また「他人に理解できる話し」や「相手が考える規範に反しない話し」ではない。既存に社会的に与えられたのを自分のなかに内在化させるこ

⁴¹ 感覚的なもののパルタージュは共通のものを先に前提し、共通の領域に属するものとそうでないもの、そしてそれに参加する資格のある者とそうではない者とを分けることを意味する。

⁴² ジャック・ランシエール『政治的なもののほり』 p. 253。

⁴³ ジャック・ランシエール『不和』 p. 17。

とではない。「不和」は「自分が語る世界を現す」ことであり、「そのように見る枠を持っていない者に現し出すべき」ものである。そして「不和」は「分離された世界を一つに集めて」「逆説的な世界を構成」することによって論証する⁴⁴。ランシエールはそれが不透明で矛盾的な人生と、その人生に問題があることを確認する方法であると言う。

そして「不和」は「権利証明を構成」することである。すなわち「不和」は共同の言語を持っている者として相手にも理解される権利があることを要請することである。このとき、言葉が理解できないということは知識の不足による「単純な没認識 (méconnaissance)」や「構造的な没認識」としてのイデオロギーではない。また、概念の不明瞭さや曖昧さによって誤解が生じる言語状況でもない⁴⁵。それは「論拠を交換する共通世界」を認めようとしぬ相手「理解されうる権利があることを証明」することである⁴⁶。ランシエールは「私の話、理解しましたか? (Vous m'avez compris?)」という文章を例として挙げ「不和」の構造を説明する。疑問文に見えるこの文章には、「あなたは理解していないし、理解の必要も感じていない」、さらに「あなたは理解する能力を持っていない。だから服従しなさい」という意味が含まれている。前者は同等の相手が理解の能力をそなえており、会話の資格を持っていることを意味する。一方、後者は不平等な地位にある相手であることが前提される。この時の話しには、会話の当事者間に人間学的な位階や政治的な位階が設定されている。そしてこれを理解するということは、相手が「命令する人と服従する人の間の世界を共有するために」話しているということと、「共通言語の存在を拒否」⁴⁷することであるということを知るという意味である。ランシエールは普遍者の存在や会話の当事者間に共同の世界、共同の合理性が存在するということを拒まない。「不和」はむしろ「共通の対象」の現存あるいは不在に関係することで、「共通のものの感覚的な顕示と関係」⁴⁸することである。

そしてランシエールは「不和」を「理念や感情の葛藤」ではなく、感覚能力の体制の間の葛藤として把握する。「不和」を中心に置いて「感覚的な枠を再編成する活動」として芸術と政治を挙げるランシエールは、労働者新聞に載せられた労働者の文を通じて感覚体系の「不和」を説明する。床を張る仕事をする労働者が「自分が部屋の床を張る作業を終わらせるまで、自分の家にいると思ひその部屋の配置を気に入っている。……絵のような風景を眺めながら……腕の動きを止めて、広い展望に向けて翼を広げて……所有者たち以上にその展望を満喫する」。この描写でランシエールは「腕の活動と視線の活動の間の離接」に注目する。ランシエールは

44 ジャック・ランシエール『政治的なもののほり』 p. 253。

45 ジャック・ランシエール『不和』 p. 17。

46 ジャック・ランシエール『不和』 pp. 96-97。

47 ジャック・ランシエール『不和』 pp. 86-93。

48 ジャック・ランシエール『不和』 p. 19。

「腕が持つ労働の空間を割って、自由な非活動の空間を差し入れる視線」に二つの感覚体制の間の「不和」があると説明する。そしてこの美学的な専有は社会的に与えられた地位にふさわしくない身体の構成を意味する⁴⁹。嗜癖された意識と感覚が定着した体は、嗜癖と関係のないほかの感覚を「間違い (wrong)」と見なして排除しようとする。嗜癖の体から脱し自分になるということは、今まで見えなく、見ようとしなかった自分自身を現し出すことである。そしてその現しには間違いとして認識されたものごととともに「不和」が伴われなければならない。

政治的な証明の論理が現れること (manifestation) の感性学であるならば⁵⁰、排除を通じて一つに包摂するのは正体化の論理である。このように治安を意味する正体化 (identification) は生活世界を社会学的に識別可能なものに分け、その場に合う話しや聞くことの手を分けて知覚の仕方を規定することによって参与の形式を定める。これに対して、政治は偶然的であり不安定なものである。政治は治安の土台になる感覚的なもののパルタージュ (partage du sensible) と断絶し、新しいパルタージュを作り出す。それは「一つの世界のなかに現存する不一致を顕示」させることであり、このことによって主体の世界が見えるようにすることである。ランシエールのいう主体化は、解放の論理であると同時に政治の論理である。そしてこの論理は哲学相談において「自分になること」を通じて自己治癒ができる方向に導く。相談の観点からすれば、治安の形を取る相談は「市場に適合した人間型を作ることに寄与」し、人々を社会に「参加」させる代わりに社会に「適応」させる。人生が周りの世界との関係のなかにあるということを度外視したまま「心の痛みを緩和」のみに焦点を当てる相談が行われた時、「心の痛みを集団的に誘発する社会構造」から目をそらせるという指摘⁵¹と同様に、普遍文法に合わせる相談は来談者の問題を「間違い」と見させてから始まる。ところで普遍文法と思ったものが嗜癖の定着したものに過ぎないなら、「不和」の意味を生かせる治癒が検討される必要がある。「不和」は個別化を重視して普遍文法を排除するものではない。

ランシエールは差異をそのまま顕示する主体化の様式を通じて、政治の本質を見せた。主体化の過程は一つの自己 (soi) ではなく、一つの自己と他者との関係である一つを形成することであって、このとき政治が構成されるのである⁵²。言い換えれば、自分になることの過程は相談者が来談者に同一視されるか、来談者が相談者に同一視されて一つになることではなく、相談者と来談者の「間の関係である一つ」を形成することである。また、これは嗜癖に慣れた感覚と新しい感覚の間の隙間を現し出すことから始まらなければならない。このとき来談者が自己

⁴⁹ ジャック・ランシエール『解放された観客』pp. 87-90。

⁵⁰ ジャック・ランシエール『不和』p. 103。

⁵¹ バク・ウンミ「過労働社会における治癒の必要性および限界」『大同哲学』65、大同哲学会、2013、pp. 33-37。

⁵² ジャック・ランシエール『政治的なもののほりて』p. 140。

治癒のために経験する「不和」を理解しないと、自己治癒の意味を完全に生かすことはできない。自己治癒は感覚的なものを新たに分けることによって新しい可能性を発見する過程である。また「予期せぬ能力のための空間」、「予期せぬ可能性」のための空間は、感性学としての美学が働くことによって発揮できる。決定されていないものが有する可能性が受容できる感性の形式は、例外的な感性的秩序を作る過程を通じて芸術になる。ランシエールが注目したのは、こういう感性学の可能性である。これは芸術と政治がつながる地点である。本稿ではその可能性を哲学相談の次元から見ようとしたのである。哲学相談は我々の認識の基礎を構成する感覚から世界との関係を新しく設定できるようにしなければならない。自分になることは、自分の座で自分にはないものとされている感覚を現すことから始まる。

5. おわりに

「不和」は不便である。しかし不和は治癒の過程である。この過程を通じて来談者は嗜癖または受動的な人生の傾向性から離れることができる。すなわち「不和」は自己治癒がいかなる過程を経るかを見せるものなのである。他者に称されうる既存の感覚と考え、社会体系などから認められない自分を現し出すこと自体に、すでに不便さは存在する。これは相互異なるものの共存である。自分自身になるということは、既存のものごとと慣れているものごととの間に隙間を作ることから始まる。それゆえ、他者ではない自分になる過程には「不和」が必ず伴われる。これに対して、自分自身を何かに任せたまま受動的に生きる人生は、反復と耐性によって漸進的にその強度を高めるだけである。そういう人生は他者の人生が自分のそのの代わりになってしまい、より強い刺激、より高い強度に耐性を持つ方向に進む。ないものとされている来談者自身の感覚を現すのは慣れていないことであり、その不慣れは不便を伴う。けれども、自己治癒が一時的な逃避や癒しではなく、感覚の構造を新たに作ることにあるとするならば、「不和」の過程は度外視することができない。

そして、人生というのは自分の個性を失って他者と一つになった存在、あるいは他者と分離された個体として生きていける過程ではない。それゆえ、人生の問題において共通の文法は無視できないが、共通の文法を強調して個体を疎外し排除することもできない。自分になることは矛盾の人生のなかでその緊張を守ることである。人生の問題で他者との一致あるいは他者の排除によって、自分になることはできないからである。ゆえに、自分になることについて「共に」と「別に」は一緒に議論されなければならない。これは一つがもう一つを包摂または量的に折衷することを意味するのではなく、緊張または不便さがあるべきということの意味する。ランシエールは言語状況、権利証明、感覚能力の体制を通じて「不和」を示した。これは哲学

相談の過程で発生する自己治癒の意味が解明できる概念であると見るべきである。

実践的な活動として哲学相談が人生の問題に接近するために、感性的な認識が必要であることは明らかである。しかし、嗜癖に例えられる問題状況で他者を前提し、他者を志向する感性的な認識を通じた自己治癒は限界を持つしかない。来談者を配慮しながら指示的な相談の枠を割ることと、来談者自らが自分の問題状況から離れ治癒に向かっていくこととの観点は異なるしかない。共感が他者との距離を前提することによって感情の伝染あるいは感情の合一のような感情の同一性から離れるとしても、目的論的な理性を認識するための「通路」になるということは、ほかの同一性に帰結されうるからである。しかも嗜癖の人生の来談者の場合、それは対象を異にした任せとして解釈できる。こういう観点で、来談者が相談者に自分の人生に対する理解を求めることでは、本当の意味の自己治癒へ進めない。ゆえに自己治癒は嗜癖と共感の他者志向的で受動的なこととしてでなく、自分自身が主体になることとしてその意味が探されなければならない。こういう意味で「不和」は相談の過程で、そして自己治癒の過程で新たに認識されるべきである。

自己放棄によって自分を満足させようとする嗜癖は、ランシエールのいう治安または正体化に例えられることである。ある座に分け前を割り当て、その座に合う話しと聞きと行いを指定する治安の形態は、ほかの感覚やほかの世界を排除する。異質的なものを排除し、不便さに堪えられない。しかし、嗜癖から逃れるということは嗜癖の体系を固着される「秩序と断絶する実践」であって、それはないものとされている自分自身を現すことでなければならない。そして自己治癒は自分になるための過程を通じて、周りの世界と新しい関係を作ることである。

ある対象や他者の視線によって動く自動人形のような存在にならないためには、自分自身になることが必要である。それは自分を現すことによって共通の空間を新しく作ることである。ここで相談者は来談者が「不和」を通じて自分の感覚を分け、新しい枠が作れるように助力しなければならない。そのために相談者は哲学相談の空間を「感性的なもののパルターージュ」を新にする躍動的な過程として理解し受け入れる必要がある。このことを通じて、哲学相談が追求する自己治癒の意味はより立体的になる。そしてこういう理解は、感性的な認識を通じて哲学相談の方法が多様化されうるという展望を可能にする。これは理性的な認識ではなく感性的な認識、特に感性的なものから哲学相談の方法論が探索できるという可能性を意味するのである。

【参考文献】

イ、スンフン「多様性、同感、連帯性」『東洋社会思想』25、東洋社会思想学会、2012。

- キム, グァンミョン「感性科学に対する哲学的論議—感性的な認識の問題を中心に」『感性科学』
1、韓国感性科学会、1998。
- キム, ソンヒ『哲学相談の方法論—哲学的な思考実験と自己治療』パジュ：アカネット、2016。
- キム, ミドク「共感、正体性、脱同一視 (Disidentification)」『社会と哲学』26、社会と哲学
研究会、2013。
- グォン, ジュンテ「嗜癖に関する哲学的考察—哲学相談の新たな領域」『現代ヨーロッパ哲学研
究』39、韓国ハイデガー学会、2015。
- ハン, ビョンチョル『疲労社会』キム・テファン訳、ソウル：文学と知性社、2012。
- バク, ウンミ「過労働社会における治療の必要性および限界」『大同哲学』65、大同哲学会、
2013。
- バク, サンギョ他『嗜癖の理解と相談の実際』ソウル：ハクジサ、2009。
- バク, ナンヒ「自己実現と自己治療としての哲学」韓国哲学相談治療学会学術大会、韓国哲学相
談治療学会、2010。
- バク, ビョンジュン「共感と哲学相談——マックス・シェラーの共感概念を中心に」哲学論集
36、西江大学哲学研究所、2014。
- バク, ビョンジュン「不安と哲学相談—不幸を超える治療の幸福学の観点から」『哲学論集』46、
西江大学哲学研究所、2016。
- ファン, ヒスク「共感の光と影」『哲学論集』48、西江大学哲学研究所、2017。
- ホン, キョンジャ「哲学相談のための共感的対話、理解そして解釈」『哲学研究』135、大韓哲
学会、2015。
- ユン, ヨングァン「脱正体化の政治—ランシエールの哲学における主体の問題」『文化科学』77、
2014。
- ウィリアム・ミラー (William R. Miller) 『嗜癖と動機面談』ジョ・ソンヒ、シン・スキョン編
訳、ソウル：シグマプレス、2007。
- エーリヒ・フロム『自由からの逃避』ウォン・チャンファ訳、ソウル：ホンシン文化社、2014。
- クリスティーナ・コルドウェル (Christine Caldwell) 『体への旅立ち』、キム・ジョンミョン
訳、パジュ：ハンウル、2007。
- クレイグ・ネッケン (Craig Nakken) 『嗜癖の心理学』オ・ヘキョンン訳、ソウル：ウンジン
知識ハウス、2008。
- ジャック・ランシエール『政治的なもののほとりで』ヤン・チャンリョル訳、ソウル：図書出
版ギル、2008。
- ジャック・ランシエール『不和』ジン・テウオン訳、ソウル：図書出版ギル、2015。

ジャック・ランシエール『解放された観客』ヤン・チャンリョル訳、ソウル：現実文化研究、2017。

ピーター・B. ラービ『哲学相談の理論と実際』キム・スベ訳、ソウル：シグマプレス、2011。

マルティン・ハイデガー(Martin Heidegger)『存在と時間』イ・ギサン訳、ソウル：カチ、2007。

マンフレッド・フリングス (Manfred S. Frings) 『マックス・シェーラー哲学の理解』ゲンギョヨン訳、デグ：イムン出版社、1995。

マックス・シェーラー『同感の本質と形態』ジョ・ジョンオク訳、ソウル：アカネット、2006。

マックス・シェーラー『共感の本質と形式』イ・ウルサン訳、ソウル：知識を作る知識、2013。

Rancière, Jacques, *The Emancipated Spectator*, translated by Gregory, New York, Verso, 2009.

“The Thinking of Dissensus: Politics and Aesthetics,” Reading Rancière, eds., Paul Bowman and Richard Stamp, Continuum, 2011, pp.1-17. 不一致を思考する〈言葉と弓〉9号 (<http://multitude.co.kr/366>)。